

令和3年度 第3回北海道 Society5.0 推進会議 「データ利活用ワーキンググループ」 開催概要

1 日 時

令和3年11月2日（火）10:00 ～ 12:00

2 実施場所

Web 会議（事務局は次世代社会戦略局会議室）

3 出席者

別添「出席者名簿」のとおり

4 議 題

別添「次第」のとおり

5 議 事

(1) 議事1 本日の会議について

・事務局（北海道）から説明（資料1）

(2) 議事2 第2回WGでの意見等の取りまとめ

・事務局（北海道）から説明（資料2）

- 「データを作成する手間も税金～」の文脈はネガティブな印象だが、議論はポジティブな話だったはず。業務おけるデータ作成のフローが整理されていないので、効率化したらいいのではないかという話だった。
- データを公開するところがきちんと作られてアプリと連動できるようになっていれば、データを更新することでデータを自動でアップデートする仕組みができる。ここをもう少し強調しても良いのではないか。
- 民間と行政が同じ目線でオープンデータを作って公開していくという方法論が重要。
- （今までは）古いやり方の上に IT 活用を乗っける形で進んできた。しかし DX とは、IT の仕組みの上に社会の仕組みをのせること。重要性、基盤がどちらかと言うことが逆転するのが DX。オープンデータ、データ化というのは、もう DX の一丁目一番地。

(3) 議事3 令和4年度のWGについて

・事務局（北海道）から説明（資料3）

<来年度のワーキングの取組>

- データ利活用のセミナーとかに関しては、内容そのものをオープンデータとしてできるだけ広く公開できるような内容にしてはどうかとあったが、そうあるべき。
- 前提として、データに対するニーズが無くても、自治体は（機械判読可能な形式で）データを公開すべきであるが、そうは言っても進まない。ですのでニーズの高いものから行うほうが良い。
- 道におけるニーズ調査の結果が公表されて、他の自治体でもこういうものにニーズがあるということがわかると良い。
- データを公開することと利用することは「鶏と卵」の関係。すごいニーズがあれば公開する、逆に公開されていればそれを使ってみると言うことが起こりえる。「鶏と卵」であれば、黙っていると何も始まらない。道庁のデータ棚卸しは最初のひと転がりの役目を担っている。
- ハッカソンやセミナーで（オープンデータの）事例が出てきても、汎用化してマニュアル化

するのは難しい。

- 個別の事例情報をオープンデータコミュニティの中で作っていくのはすごく重要。だからこそオープンな議論が出来る。
- 来年度に向けては、IT、DX化と言うよりは、全体の負担感を上げずに情報発信が出来る仕組みや、組織の中での吸収の仕方を議論できればと思う。
- 自治体職員向けにセミナーを実施し、データの利用度の高さを理解してもらい、ハッカソンにつなげて成果物が出来るという仕組みづくりを検討していく

<地方自治体のオープンデータ>

- オープンデータも DX も、現場は仕事が増えてしまうからやりたくない気持ちがすごく強い。
- 市町村の担当者は道から通知が来たらすごく一生懸命やるが、役場の中から言ってもやろうとしない。道庁の各担当課からセミナーやオープンデータの通知があれば進んでいくかもしれない。
- 情報発信は得意な人がやると割と素早く出来る。横串を刺すような形で情報発信のところを身軽に出来るような取組を考える。
- 行政のデータは何があるか、組織として把握出来ていないというのが一つの問題。データ棚卸しを道庁が行うなら、可視化できる手法を市町村が応用できれば良い。
- 新型コロナのデータのオープン化は、オープンデータの好事例。良い形で活用して、一般の方々の行動が変容した事例。オープンデータで世の中を良くしていこうということ。
- 他の自治体、海外でのオープンデータ活用の成功事例をまとめることも意義がある。→総務省でのまとめがインターネットにあり。
- 大学や高校などとデータ利活用で何か出来ないかと考える。学校、学生もデータを求めているということが自治体もわかると、子供の教育に使うならやらなければならないと意識変化になる。

<アイデアソン、ハッカソンの開催>

- アイデアソンハッカソンの開催をした中で、民間企業や団体をもっと巻き込んでも良かった。
- ハッカソンは新しいアイデアでプロトタイプを生み出すイベント。その後の生活で、自分に関係あるオープンデータについて考えるとか使ってみようと思えるきっかけになる。データが使いづらいとというフィードバックも得られる。1 回目を行ったことは重要な結果である。
- 自治体や企業にデータを公開してほしいと言うとき、ハッカソンで使いたいから公開してほしいと言うことが一つのきっかけになる。
- NoMaps との連携をもっと深めていくと良いのではないかな。
- ハッカソンは（データ利活用の）重要な取組の一つになるはず。将来的には自立して、コミュニティが出来て、そこで活発に色々出来るようにならないと一過性のものになってしまう。
- アプリでは無くデータを整理、作成を行うハッカソンというのもアリ。

<ロードマップ（案）について>

- 機械判読データを増やすという目標について、理解していない方が見たときは機械判読する二次データ、三次データを作れば良いと思われるので、一次データのDX化を進めていくという文言を入れると良い。
- 大前提として、オープンデータとデータ利活用って何のためにあるのかということは、ロードマップを出す前に確認しなければいけないと思っている。
- 少子高齢化で人数が足りなくなっていく中で、データ利活用とは社会の生産性とかの効率性の向上、同じことを行うにしても付加価値を上げるということ。
人と社会のリソースを有効活用していかないと日本がやばいという危機感の中で、社会全体の効率を上げるということと、データ利活用によってリソースが生み出す価値を向上していくという2点に集約される。
- 効率性の向上と、価値向上の2点を強く最初に共有した上でロードマップを見せないと、理解されないままになりかねない。

(4) 議事4 親会議への報告

- ・事務局（北海道）から説明（資料4）
- アイデアソン、ハッカソンは、民間のデータ利活用促進にも絡んでくるのでは無いか。
- 行政のデータ利活用の話と民間のデータ利活用の話で共通する部分がある。その部分は重点的に行う必要がある。
- 行政のオープンデータの推進を首長に「法律に基づいている」ことをきちんと伝えないと、担当が勝手にやっているようになって担当がきつい。首長助役にしっかり理解してもらえるようにしてほしい。
- 大学や高校などとデータ利活用で何か出来ないかと考える。学校、学生もデータを求めているということが自治体もわかると、子供の教育に使うならやらなければならないと意識変化になる。
- 民間もデータを出すことにはアレルギーがある。しかしオープンにしてもらいたいデータもあって、求人データや商品データなど。アウトプットイメージをしっかりと組み立てることで、データを使ってほしいというサイクルが出来れば理想。
- 親会議に対してデータ利活用の取組は何に対して必要なのかということを伝えることは大事。
- デジタル基盤の上に社会の仕組みをのせていくことをやらなければいけない。そういう意識の中で、社会の効率を上げる、付加価値の高いことを生み出していくことを考えると、データ利活用は欠かせない。これを強く親会議にインプットする。
- 道庁を中心に（鶏と卵の）最初のひと転がりをうまく進めないと、いい議論をしてもけっこくつかないことになる。
- 北海道 Society5.0 が先に進むと。それがひいては我々のこの先、北海道の生活が良くなるのか、みんなの暮らしが便利になるとか、そういうところにつながっていかないと意味がない。そういうところにつながっていくような取組にぜひなれば良い。